

“ The Turn of the Screw ”

「序文」と『創作ノート』を手がかりに

名 本 達 也

“The Turn of the Screw”: Reading “the Preface” and *The Notebooks*

Tatsuya NAMOTO

要 旨

ジェイムズの “ The Turn of the Screw ” は、その出版後 1 世紀以上が経過しているが、作品解釈の根幹に関わる点、即ち、幽霊が実際に出現しているか否かという点においてさえ一致をみていない。ニューヨーク版の「序文」において、ジェイムズは読者を騙そうとする意図があったことを述懐する。これは、当時のジェイムズが、読者や批評家が彼の作品を適切に理解してくれなかったことに不満を感じていたことを考慮すればもっともであろう。また、『創作ノート』を読めば、小説家自身がカンタベリー大司教から聞かされた “ The Turn of the Screw ” のもととなる逸話に関する情報は杜撰で正確さを欠き、はなはだ心許ないものでしかなかったことが窺える。ジェイムズは単に、日常我々が人から聞かされる話とは、この程度の精度で伝えられるものでしかないという事実を示したに過ぎないのではないだろうか。そして実は、詳細について知り得ることもできない物語に、勝手な解釈を繰り返し広げる読者や批評家を嘲笑することも、この中編小説の狙いの 1 つであったのではないかと考えるものである。

序

ヘンリー・ジェイムズの “ The Turn of the Screw ” (1898) は、出版後既に 1 世紀以上を経ているが、その解釈にあっては百花繚乱の様相を呈し、一定の結論へ収束してゆくというよりも、さらに奇抜な読みの可能性へと拍車がかかり、多様化しているように見受けられる。Beidler が指摘する通り、従来の批評は、ある学者の仮説を礎としてさらに仮説が積み重ねられてきたため、どのような荒唐無稽な解釈を持ち出しても、それを裏付けてくれるような説が都合よく見つかってしまう。これまでに持ち出されてきた主だった読みの大部分を網羅しているように思われるので、少々長い Beidler の指摘を以下に引用してみる。

Anyone who has read the critics knows that, armed with certain assumptions, they can prove almost any-

thing by a close reading of the text: that there are ghosts in the story; that there are no ghosts in the story; that the children are good; that the children are evil; that the governess is insane; that the governess is a liar; that the governess is a saint; that the governess is an emotional cannibal; that the governess is a novelist; that the governess is possessed by the devil; that Douglas is Miles; that Douglas is gay; that the narrator of the opening frame story is a woman; that Douglas had proposed marriage to the governess but had been rejected; that Miss Jessel is alive and locked in the tower; that the tower is the phallic symbol; that Mrs. Grose is the mother of Flora; that Peter Quint is not dead after all; that the governess's father is mad; that the governess feels an incestuous attraction for Miles; that the governess accidentally chokes Miles to death; that the governess suffocates Miles; that the governess murders Miles to keep him from carrying tales to his uncle; that the governess has frontal-lobe epilepsy; that the governess spends the decade after Miles's death in an insane asylum; that Bly is the setting for a Faustian allegory; that Bly is an allegorical Garden of Eden; that Bly is James's own haunted mind; that James had once witnessed his parents making love; that James was horrified by his own attraction to little boys; and so on. (Beidler 12)

「Mrs. Grose が Flora の母親である」、「Miss Jessel は、実はまだ生きている」、或いは、「Douglas はゲイだ」といった専ら奇矯を衒ったとしか思えない意見も混在しているが、上に掲げた一節は、紛れもなく“TS”の批評史の一頁なのである。

“TS”批評の経緯は、作品理解の根幹に関わる問題点、すなわち幽霊が本当に出現したのか、それとも家庭教師の幻覚或いは妄想の産物なのかという点においてさえ、合意と確認がなされることのないままに、その上にさらに奇抜な解釈が積み上げられてきた。“TS”出版後、既に1世紀以上が経過した今もなおこの点についてさえ決着をみていないということは、時が経過したからといって、万人を納得させるような解釈が今後登場するとも思えない。さらに言えば、これほど議論されても幽霊の出現が現実なのか、或いは家庭教師の幻覚なのかさえ確定できないということは、この中編小説が、そもそも読み解けるように拵えられていないのではないかとさえ思えてきてならない。² 幽霊が出現したのか否かに拘泥する二元論的な解釈には閉塞感が漂い、出口の見えないまま堂々巡りに陥ってしまった感がある。本論では、語りの構造、幽霊は本当に出たのかという問題、Milesの放校と死の原因等について、これまでに提起されてきた仮説は尊重して検証しつつ、同時に、どちらかといえば等閑視されてきたテキストの外にある事柄ジェイムズの『創作ノート』やニューヨーク版の「序文」等の資料を幾つか持ち込んで、“TS”の中で何が起きたのか、そして、この中編小説においてジェイムズは何を主張したかったのかについて考察を試みてみたい。

I

“TS”の語りの仕組みは、ジェイムズ文学の中でも最も手が込んでおり、その構造を簡単に紹介するだけでも1つの物語が出来上がってしまう。語り手「私」は、あるクリスマス・イヴの夜の集りに参加している。そこで、この物語の2番目の語り手 Douglas が、これまで誰にも話したことの無い恐ろしい幽霊話を披露することを思いつく。その逸話は、手記であり、彼の手元にはないので使いをやって取り寄せることになるため、一同は後日再び集まることになる。

この手記は、“TS”のメインストーリーとなる部分の語り手、つまり3番目の語り手となる家庭教師によるものだが、Douglasによれば、彼女は、彼がトリニティー・カレッジの学生で20才だった時、妹の家

庭教師をしていたという。全編を通して彼女の名前が明かされることはなく、年齢は Douglas より10才年上であった。そして、恐らくは Douglas が家庭教師に恋心を寄せていたのではないかという可能性がぼんやりと暗示される。

Mrs. Griffin, however, express the need for a little more light. “Who was it she [the governess] was in love with?”

“The story will tell,” I [the narrator] took upon myself to reply.

“Oh I can’t wait for the story!”

“The story *won’t* tell,” said Douglas; “not in any literal vulgar way.”

“More’s the pity then. That’s the only way I ever understand.”

“Won’t *you* tell, Douglas?” somebody else enquired.

He sprang to his feet again. “Yes to-morrow. Now I must go to bed. Good-night.” And, quickly catching up a candlestick, he left us slightly bewildered. From our end of the great brown hall we heard his step on the stair; whereupon Mrs. Griffin spoke. “Well, if I don’t know who she was in love with I know who *he* was.” (151)

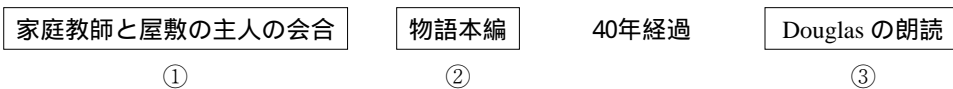
家庭教師も恐らくは Douglas に好意を抱いていて、それ故に死の直前になって彼に手記を送ってよこした。そしてさらに、Douglas が同じく死を迎えた時、1 番目の語り手「私」に家庭教師の手記を送ってくるわけだが、我々読者が眼にすることになるのは、Douglas から送られてきた手記を「私」が一字一句違わずに書き写したコピーである。McElroy は、“They [Douglas and the governess] met a decade after her tribulation at Bly, when he was undergraduate of twenty and she the thirty-year old governess to his sister; he knew her for the remainder of her life, until she died at age fifty”(217) と述べて、時の経過により物語が風化し、語りの正確さを失ってしまっていると指摘するが、これは、Douglas は手記を朗読したこと、そして、本編の部分も同じく「私」の手記が読者に提示されているという点を考えれば、的外れな指摘であるとわかるだろう。問題なのは、寧ろ、各々の語り手が親密な関係にあり、それ故に生じる利害関係から、何かを隠したり、歪曲して読者に物語を伝えているという可能性ではないだろうか。

誰にも披露したことの無い手記を託すからには、家庭教師と Douglas、そして Douglas と語り手「私」それぞれ 2 人の間には、相当深い信頼或いは愛情が通い合っていると考えるのが自然である。このような形で Douglas が、集まった人々の前で手記を公開するのは、彼女の愛情と信頼に対する裏切り行為ではないかとの指摘さえある (Jolly 104)。当然、手記には改竄された要素があるのではないかと思われるも仕方のないような設定である。Douglas 自身は、家庭教師の手記を朗読した。実際にその場面が読者に伝えられるのが最も物語を正確に読者に伝える手段であるはずなのだが、それを「私」が後になって書き写した方を読者に提示するというのは、「私」が手記に何かしら手を加えたのではないかという疑念を呼び起こし、提示される話の信憑性を著しく損なうものである。

“TS” より 2 年ほど先に世に出た “The Figure in the Carpet” (1896) は、話の筋立てが、“TS” の 3 人の語り手たちの関係によく似ている。この短編では、語り手「私」が熱烈に崇拝している小説家 Vereker の作品の意図 作品タイトルでもある「絨緞の下絵」 を、文芸批評家の友人 Corvick が発見したと言う。彼は、「私」にこれを伝える前に旅先で客死するが、この時、妻 Gwendolen にこの内容を託す。後に彼女は、さえない作家 Drayton Dean と再婚し、彼女自身もお産で命を落とすことになる。そこで、「私」は Drayton に「絨緞の下絵」について尋ねてみると、妻はそんな話をしたことはなかったと告げられる。

“The Figure in the Carpet”においては、芸術作品の解釈が秘密として語り継がれるが、“TS”では、家庭教師の手記が受け継がれる。“The Figure in the Carpet”の場合もそうであるように、秘密の受け渡しは、男性（Corvick）から女性（Gwendolen）へ、そして女性（Gwendolen）から男性（Dean）へと異性間で繰り返される。それ故に“TS”における家庭教師（女性）が手記をDouglas（男性）に託し、それを受け取った語り手「私」が女性であると主張する意見がでてくるのも頭ごなしには否定できない。飽くまで、推測は可能だが、証明することは不可能な議論と言えるだろう。このように、語り継がれる秘密、それも読者には決して明かされることのない秘密を扱った短編が、“TS”よりも僅か2年前に書かれているだけに、読者としては“TS”の3人の語り手の間に、我々が推測する以上に親密な関係が結ばれており、彼ら何か重大な事実を隠している、或いは、それを書き換えることによって歪曲してしまっているのではないかと思わせるような語りの構造になっている。

複数の語り手を持つこの複雑な語りの構造は、様々な問題をはらんでいる。既に触れた3人の語り手の役割を明確にするために、今一度、以下の図を参考にしながら、これらの諸問題についても簡単に概観しておくことにしよう。



TSのストーリーを実際に起こった出来事の順に並べれば、上のような形になる。物語の本編は②に該当するが、この部分は先ほどから述べている通り、家庭教師が残した手記をDouglasから託された「私」が、本人の主張するところによれば、正確に書き写したものであることになる。③は、クリスマス・イブにDouglasが行った朗読であり、読者には、③、①、②という順番で提示される。③は、章のタイトルこそ与えられていないが、実質的には“TS”のプロローグと位置づけられる。注意しておかなければならない点は、家庭教師の生い立ちや、彼女がHarley Streetに住む主人　この人物が、MilesとFloraの伯父で、Bly邸の所有者でもある　にどのような形で出会い、雇われるに至るかについては、我々読者は③で知らされる。③におけるDouglasの語りを「私」が聞かされるという形で提示され、手記によるものではない。つまり、起こった出来事の順に並べれば、上図のようになるが、本編に直結する出来事でありながら、①の内容は③で説明される形をとっている。それでも、③自体が、「私」の視点を通して報告される限り、Douglasと「私」各々が事実を歪めて伝えた可能性を排除できるものではない。

3人の語り手の間に、深い愛情或いは強い信頼が通い合っていることを考慮に入れば、どこで話が歪曲され、何が語られなかったか、ということ特定することは困難を極めるだろう。語りの構造として、物語が次々と語り継がれるため、捉えどころのない曖昧さを醸成し、語られた内容のどの部分に対してどの語り手が責任を負うのかという点を突き止めることも不可能にしている。

冒頭で引証したBeidlerの一節に含まれるものも含めて、この1世紀の間に提起されてきた殆どの解釈は、Cookも指摘する通り、以下の2つの解釈の延長線上にある。既に述べたとおり、1つめは、家庭教師が語っている事柄は全て真実であり、幽霊は実際に出現していると主張して、“TS”を幽霊物語であるとする解釈だ。2つめは、彼女は幻覚をみているのであって、報告されている手記の中味は彼女の妄想の産物だとする解釈である。大半の解釈は、このどちらかの前提を拠り所として議論が展開されるが、その礎となる部分が証明されないまま批評が積み重ねられていることを考えると、極端な言い方をすれば、これまでに出版されてきた解釈の半分は誤読の上になりたっていると言ってしまっても過言ではない。ともかく、“TS”の物語の全体像が確定できなければ、家庭教師の語り手としての位置づけさえ定まらない仕掛けになっているところが、この作品の最大の問題点と言えるだろう。

II

“ TS ” に関して試みられた解釈はあまりにも幅広く、奇抜で一見信じ難いようなものも少なくない。本章では、まず、これまでに提起されてきた主だった解釈を概観しておきたい。最初に確認しておきたいのは、“ TS ” における Jessel と Peter Quint の幽霊の出現に関して読者に与えられている情報である。幽霊の出現した時と場所、性別、その時の状況、消え方等をまとめると以下ようになる。

これまでに提起されてきたほとんどの解釈は、男性の幽霊は全て Quint、そして女性の全ての幽霊は Jessel のものであることを前提に展開していると言ってよいだろう。

これら全ての幽霊出現に関する報告は、家庭教師の視点を通じて語られるわけであるから、彼女が幻覚

| 章 | 時 | 場所 | 性別 |
|---|------------|-----------|----|
| 第 1 回目 第 3 章 | 6 月の夕暮れ、 | 屋敷の塔の上 | 男性 |
| 家庭教師を凝視しているが、やがて向きを変える。男がどうなったかについては、中途半端な記述で終わってしまう。“ He stopped at the other corner, but less long, and even as he turned away still markedly fixed me. He turned away; that was all I knew. (178) ” | | | |
| 第 2 回目 第 4 章 | 日曜日の午後 | 食堂の窓の外 | 男性 |
| 窓の外へ男性の顔が張り付いているのを家庭教師が目撃。彼女が外へ走りてみると、誰もいなかった。 | | | |
| 第 3 回目 第 6 ~ 7 章 | ある日の午後 | 湖の対岸 | 女性 |
| 出現の 2 時間ほど後に、家庭教師が Grose 夫人に報告する形で語られる。 | | | |
| 第 4 回目 第 9 章 | 夜明け前 | 階段の踊り場 | 男性 |
| 塔の上でみたのと同じ男性だと認識できるほどの距離で家庭教師と見つめ合うが、ゆっくりと背を向けて階段を降りてゆき姿を消す。 | | | |
| 第 5 回目 第 10 章 | 深夜 | 屋敷内の階段 | 女性 |
| 第 4 回目の男性の幽霊との遭遇以降、家庭教師は、深夜に幽霊を探して屋敷内を彷徨し始める。階段の下に頭を抱えたまま女が座っていたが、彼女が階段を降りてそこへ辿りつこうとすると、振り向くことなく消える。 | | | |
| 第 6 回目 第 10 章 | 深夜 | 塔の上 | ? |
| 家庭教師は、夜中に Flora が起き出してブラインド越しに庭の方を見ているのに気づく。庭の芝生の上にいたのは Miles で、彼の視線を追うと、自分のいる建物の塔の上に、何者かがいることを家庭教師は感じ取る。 | | | |
| 第 7 回目 第 15 章 | 日曜日の朝 | 子供たちの勉強部屋 | 女性 |
| 屋敷のものが教会へ行って出払っている時に、家庭教師だけが早く帰ってくると、子供たちの勉強部屋の彼女の席に、黒いドレスに身を包んだ女が座っている。私が “ You terrible miserable woman! ” (257) と罵ると、次の瞬間には姿を消す。 | | | |
| 第 8 回目 第 20 章 | ある日の午後 | 湖の向こう岸 | 女性 |
| Flora を探しに行くのに、Grose 夫人も同行する。Jessel が出現したと家庭教師が指差すが、彼女はその出現を認めるわけではない。Grose 夫人は、 “ Where on Earth do you see anything? ” (280) と返し、そして、Flora も Jessel は見えない (281) と言う。2 人が幽霊の出現を否定して立ち去ると、家庭教師は意識を失う。 | | | |
| 第 9 回目 第 24 章 | 11 月のある夕食後 | 食堂の窓の外 | 男性 |
| 家庭教師が Miles に、彼女の書いた Harley Street の主人宛の手紙を盗んだかと問いただしているところへ Quint が出現。少年は、家庭教師の腕の中で息を引き取る。 | | | |

を見ているのであれば、出現の回数が増えるのではなく、Quint と Jessel は共に実際には一度も現れていないことになる。また、家庭教師が塔の上で男性を見た（上の表第 1 回目）という証言や窓の外に男性の顔が張り付いているのを見た（第 2 回目）という証言は事実かもしれないが、その男が何か超自然的な力を発揮したわけでもなければ、普通の男と取り立てて変わっているところがあったわけでもない。単に、屋敷の誰かであったり、近隣に住む人物であったかもしれない。ところが、多くの解釈においてこれらの男性の幽霊 幽霊と仮定するならということであるが は、Quint の幽霊であるとして、疑いはさむことなく議論されてきた。このような不確定要素があることには留意しつつ、以下では Miles の放校・死、そしてそれぞれの理由等を始めとして、物語の中で一体何が起きているのかを検証してみたい。

まず、幽霊が出現したとする解釈の方からみてゆくことにしよう。その場合には、家庭教師が語っていることは真実となり、彼女は、Grose 夫人と共に子供たちを邪悪な霊から守ろうとする守護者の役割を担っている人物となる。Miles が生前の Quint や Jessel に接していた結果、道徳的に墮落し、最後には家庭教師の力では及ばず、幽霊に命を奪われてしまうと考えると、彼女は子供たちを救済しようと必死に奮闘したが敗北してしまう悲劇のヒロインと位置づけられるだろう。作中における幽霊は、子供たちを墮落させ、Miles を死の世界へと連れ去ろうという意図を持って登場していると考えられる。幽霊が実際に出現しているとする解釈は、極めて単純明快なように思われる。

では何故、これまでの批評家たちは、幽霊が出たとする解釈を単純に受け入れることができないののだろうか。Huntley は、“TS”を分身譚とみなしており、幽霊は家庭教師の分身であるという解釈を繰り広げているのだが、その中で一つ興味深い点を指摘している。それは、男性の幽霊にも女性の幽霊にも、台詞が一切与えられていないという点だ（233）。確かに、幽霊は言葉を発しただけでなく、子供たちに危害を加えようとしたわけでもない。それでいて Miles が最終章で命を奪われてしまうというのは不自然である。家庭教師に対しても、彼女が近づいてゆけば背を向けて立ち去ったり、急に姿を消したりするだけで、通常文学作品において幽霊が担うような役割を全く担っていない。Shakespeare の *Hamlet* のような復讐劇から、Dickens の *A Christmas Carol* のように感動を呼ぶ物語まで、作品の中で幽霊が果たす役割は様々である。単に、人間の心の内に恐怖を呼び起こすための小道具として用いられる場合もあれば、登場人物同様に、他の人物に特定のメッセージを伝えるような役割もある。魔法使いや精霊、分身等の超自然的な存在も同様の機能を担っていると考えるとよいだろう。しかし、役割を担っていない幽霊の存在というのは、文学史上でもほとんど見当たらないと言ってよいのではないだろうか。このように、何故幽霊が登場しなければならないのかがはっきりとしないため、家庭教師の妄想なのではないかという解釈を助長し、にもかかわらず Miles の死が否定できない事実として残されるために、こじつけが必要となってくる。これが幽霊出現説の否定へと繋がるメカニズムと言えるだろう。

McElroy は、家庭教師が見た男性の容貌を Grose 夫人に伝えた程度の情報で、それが Quint の幽霊だと断定するには無理があると指摘する。確かに、男が「俳優 (“actor”）」のような雰囲気であり、紳士ではなかったというだけの描写で、Grose 夫人がこの不審者を Quint に結びつけるのには無理があるだろう。補足しておく、 “TS”のテキストの中では、以下のような表現で問題の男性の顔立ちは描写されている。

“He has red hair, very red, close-curling, and a pale face, long in shape, with straight good features and little rather queer whiskers that are as red as his hair. His eyebrows are somehow darker; they look particularly arched and as if they might move a good deal. His eyes are sharp, strange awfully; but I only know clearly that they’re rather small and very fixed. His mouth’s wide, and his lips are thin, and except for his little whiskers he’s quite clean-shaven. He gives me a sort of sense of looking like an actor.”(190-91)

上の一節は、一般的な小説における登場人物の容貌の描写と比較して、その分量と詳しさににおいて大差ないものように思われる。ただし、家庭教師が Quint の表情を見ることができたのが僅か数秒間でしかなかったことを考えると、³むしろ、これほど仔細に言い表せる彼女の瞬間的観察力と記憶力は不自然にさえ思われてくる。さらに、McElroy は、日中雨が降っていたわけだから、湿度から生じる水滴で窓の外が明瞭に見通せるはずはないと述べる (221)。

それでは McElroy のアプローチに全く落ち度がないのかと言えば、これも簡単には片付けられない問題だ。例えば、ジェームズが “TS” を純粋な幽霊物語として執筆したと仮定すれば、McElroy の指摘した湿度や水滴の問題の方が的外れだったことになる。童話やお伽噺或いは、ファンタジーの類を読む場合に、科学的に説明がつかないからといって、その内容を全て否定してしまうことは必ずしも適切とは言えないだろう。それでも、一瞬の出来事であるにも関わらず、家庭教師が Grose 夫人にこれほど精密な描写を試みせるのには無理があるように思われても仕方がないところだ。扱っているテーマはお伽噺的で超自然的な要素を含んでいるにもかかわらず、Quint の容貌の描写で引用した一節が示すように、その手法においては写実的でリアリズムの手法による小説であるかのような印象も受ける。幽霊の出現の意図が感じられない点、「信頼できない語り手」としての家庭教師等、幽霊出現説を単純には受け入れることが出来ない要素が “TS” の中に幾つか存在していることもまた事実なのである。

“TS” において幽霊は出現していないという解釈の側に立つならば、精神分析的手法のような科学的アプローチや、先に触れた McElroy の指摘のように、些細な点に関心を向けることも有効になってくる。基本的に、この解釈の主流は、家庭教師が幻覚をみたとする考え方に立脚するものであるが、そうではない見解を唱える研究者もいないわけではない。まず、幻覚説以外の解釈をみておくことにしよう。個々の説について細やかな検討をするには膨大な紙面を必要とするので、ここでは各論の問題点を指摘するに止めておきたい。Aldrich は、Grose 夫人が子供たちの愛情を勝ち得ようとして、家庭教師をライバルとみなして彼女を破滅に追いやろうと画策し、Bly 邸での事件が起こるに至ったと主張する (Nardin 132)。だとすれば、家庭教師は最後まで彼女に欺き通されたということになるが、これは不自然であろう。家庭教師は、終始 Grose 夫人を “My counselor (166)”, “my colleague (168)”, “my companion (180, 203, 239)”, “my friend (204, 205, 238)” などと親しみをこめて呼び、彼女を自分の味方側であると認識している。また、文字さえ読めず (166)、お世辞にも頭の回転が速いとは言い難い Grose 夫人が、最後まで家庭教師を騙し続けることができたとは考えにくい。仮に、一連の幽霊騒動が全て彼女の仕組んだものだとすれば、結末において Miles が家庭教師の腕の中で息をひきとることになる原因は説明がつかない。古茂田淳三氏は、幽霊の正体は「子供たちのいたずら芝居」、「女家庭教師の誤認」、そして「(女家庭教師の) 幻覚」の混合 (古茂田『H・ジェームズ「ねじのひねり」とその前後の小品』107) であるという理論を展開する。Miles と Flora は、2人して家庭教師を幽霊遊びでからかっており、Grose 夫人はそれに組した共犯者だという。家庭教師は、随所に Grose 夫人の不信な言動をみてとる。夫人が子供たちに味方しなければならぬのは、雇われの立場の弱さから仕方がないというわけだ。古茂田氏の分析手法は極めて精密で、そのアプローチに違和感はないが、やはり、どうしても受け入れることのできない点が幾つか存在する。一例を挙げれば、6章から7章にかけて湖の反対側に出現する Jessel の幽霊が、屋敷の使用人の1人である Luke の女装だ (45) とするのは流石に無理があるだろう。また、既に触れたように家庭教師が常に “my counselor”, “my colleague” 等と読んでいることから考えると、少なくとも家庭教師自身は、夫人を自分と共に行動してくれる味方側の人物として認識していると考えられる点で齟齬が生じるのではないか。そして、相変わらず問題として残るのは、実際に幽霊が出現していないのに、何故 Miles が亡くなるのかという疑問と、出現していない幽霊を幻覚や勘違いで幽霊だと思ってしまう物語を執筆することによ

て、一体ジェイムズが何を主張しようとしたかったのか、という疑問である。幽霊が出現していないとする解釈には、どうしても Miles の死をうまく説明できないという弱点が付き纏う。

では、次に幻覚説を検証しておこう。家庭教師の心理状態を精神分析的手法によって明らかにしようとする考え方は、大よそ以下のようなものである。彼女は、雇い主である Harley Street 在住の主人に憧れを抱いているのだが、家庭教師が Bly の屋敷でうまくやっているかどうか、彼が様子を見に来てくれるのではないかと期待してしまう。そして、彼女は、ありもしない男性の姿を屋敷の中で目撃してしまう幻覚の虜になるというものだ。ただ、この読み方では、なぜ女性の幽霊が登場しなければならないのかについて、十分に納得のゆく説明を与えることができないだろう。幻覚説に従えば、妄想にとりつかれた家庭教師に振り回される屋敷の住人たちは被害者であり、Miles の死も彼女の手によってもたらされたことになる。

家庭教師は Bly を訪れてすぐ、天使のような少年 Miles に引きあわされるが、彼は素行が他の生徒に悪影響を及ぼすという理由で、学校を退学になったところであった。Miles の級友に対するどのような言動が放校の原因であるのか、具体的な記述はないけれども、この点に関する限り研究家の見方はほぼ一致している。それは、Quint から「性」に関する知識を吹き込まれた、或いは、Quint と Jessel の情交を Miles が目撃してしまった、そして、それをクラスメイトに吹聴したため退学になったという推論である。ヴィクトリア朝の時代には、屋敷の使用人やはその子供たちが、雇い主の子供たちに道徳的に悪影響を与えるということは稀ではなかった。⁴ Quint と Jessel の間に肉体関係が結ばれていたであろう可能性は、露骨な表現を避けようとはしているが、Grose 夫人の言い回しからほぼ間違いないと推察できる。これは、“TS”の舞台が、上品ぶることを好むヴィクトリア朝半ばに設定されていることを考えれば無理もないことであろう。Grose 夫人は、“Miss Jessel was infamous”(206)と述べて、彼女の生前の品行の悪さを非難する。そして、Jessel が Bly を去って後にすぐになくなった理由についても、露骨な表現は避けて以下のような抽象的なやり取りにとどめている。

“Then you [Mrs. Grose] do know what she died of?” I [the governess] asked.

“No I know nothing. I wanted not to know; I was glad enough I didn’t; and I thanked heaven she was well out of this!”

“Yet you had then your idea ”

“Of her real reason for leaving? Oh yes as to that. She couldn’t have stayed. Fancy it here for a governess! . . .” (208)

Hill は、Jessel が妊娠してしまったために Bly には居られなくなり、その後流産でなくなったのだらうと推測する(57)。そして、2人の情事を目撃してしまった Miles が、その意味を理解できないまま友人たちに話し、退学になってしまったというわけだ。この解釈は、一連の出来事に一貫した流れを持たせたなかなか説得力のある読みである。もしそうであったなら、Miles 自身は innocent であったことになる。Miles は、退学させられて初めてこのようなことを他言してはいけないと気づき、Bly へ戻ると、恐らくは同じようなことを目撃したであろう妹に、Jessel と Quint の話は極力避けるようにと告げる。その結果、子供たちは2人のことを話題にしたがらないというわけだ(Nardin 138 - 39)。

次に、解釈のわかる Miles の死についてであるが、幽霊が出ているとすれば、超自然的な力によって命を奪われたことになるだろうから、この場合にはこれ以上の説明は必要がないだろう。幽霊が出現したと仮定するなら、Miles の死に関する議論は極めて単純明快なものとして片付けることが可能だ。

幽霊の出現を否定する解釈の中でも、比較的奇抜な着想のものを先に紹介しておこう。Beidler は、Miles の死は “ a death-like catatonic trance ” (219) であって、彼は死んではいないと指摘する。Miles が実際には死んでいないとする議論は、Douglas は成長した後の Miles であるとする説に繋がってゆく。同様に、古茂田氏は「アレゴリー的な死を与えられたマイルズの蘇った姿が冒頭のプロローグのダグラスなのである」(古茂田『H・ジェームズ「ねじのひねり」とその前後の小品』61)と述べて、Douglas は Miles の成長した姿だという立場をとっている。

幽霊出現を否定する立場をとるもののうち、主流となっている解釈は、家庭教師が激しく抱きしめ過ぎたために窒息したとする説と、幽霊が出現していると主張する家庭教師に怯えて、極度の恐怖心によって Miles に心臓麻痺が起こったとする2つの説がある。しかしながら、これらも漠然とした推論の上に成り立っているものであって、テキストがはっきりとした手掛かりを与えてくれているようにも思えない。Clark は、心身共に健全な子供が単なる精神的なショックだけで死に至るとするのは現実的でないとし、Miles が病弱だった可能性を指摘する。さらに、学校が Miles を退学させた理由も、リュウマチ熱からくる発作等、健康上の理由から面倒をみることができないと判断したからだとしている (Clark 111)。その理由として、テキスト中に具体的に Miles が退学となった理由が記されていない点を Clark は挙げています。確かに、テキストでは “ They simply express their regret that it should be impossible to keep him [Miles] ” 或いは “ he’s an injury to the others ” (166) と記されているだけで、学校側が Miles を退学させる詳細な理由について言及はない。興味深いのは、Matheson が全くその逆のことを主張をしている点であろう。Matheson は、何故 Miles が死んだのかについて、論理的に納得させてくれる論文はまだ登場していないとし、その上でテキストに従えば、Miles が病弱であったと示唆する部分は見当たらないと述べる (172)。それ故に、心臓麻痺説を否定し、窒息死説支持ということになるのだが、子供を何かから守ろうとして力を入れて抱きしめた結果、死に至らしめてしまったというような話は、現実の世界では聞いたことがない。窒息死又は恐怖から生じた心臓麻痺というのが、従来議論されてきた Miles の死因の主なものなのであろう (Beidler 198) が、これらととも、現実の世界で物事が起きる基準から考えれば、相当理不尽な出来事と言わねばならないだろう。

Clark が Miles は病弱だとし、Matheson は極めて健やかだったはずだと正反対の主張で対立したように、“ TS ” において与えられる情報はあまりにも抽象的で、数頁を費やして詳細な描写がなされているようにみえても、実は信頼できる客観的な情報は与えられていないのである。その点、以下に挙げる Hill の指摘は正鵠を射ていると思われる。Miles に関して我々読者が知らされる事柄は、家庭教師と Grose 夫人の会話を通す形になるが、この中に確固たる事実は極めて少ない。Hill によれば、物語初め3分の1で、我々読者が Miles に関して得ることのできる客観的な情報は、以下に挙げる3点であり、それ以外は、彼女たちの推測や思い込み等で歪曲された要素を含んでいるという。

- 1 . “He was incredibly beautiful.”
- 2 . for a period of several months, Quint and the boy had been perpetually together.
- 3 . Miles has been thrown out of school because he was “an injury to the others,” a “contaminating” or “corrupting” influence or something of that nature. (Hill 57)

実は、Miles に関する描写に限らず、客観的かつ具体的な情報を含んだ描写は、“ TS ” にはそれほど多くない。家庭教師自身は勿論のこと、Flora、Grose 夫人、生前の Quint や Jessel についても、テキストは信頼できる情報など全く与えてくれないことに読者は気づくべきであろう。

本章で検証してきた通り、一貫性を持たせた解釈では、“TS”の中の事象全てを合理的に説明できていないことがわかるだろう。精神分析的手法を用いれば、首尾一貫して科学的かつ客観的な分析によって“TS”を解体してゆくべきだが、これでは Miles の死について論理的な説明がつかないために、実際には死んでいなかったとか、アレゴリカルな死である等、非現実的と呼ぶべき奇抜な解釈、科学的分析手法からの逸脱が必要となってくる。幽霊が出現したとするならば、やはりその役割が今ひとつ不明瞭であるし、家庭教師は結局何をするでもなく、まんまと Quint に Miles の魂を奪われてしまったことになる。

“TS”に関しては、幽霊が出現したか否かという最大の論争点から、上で検証した Miles は健康であったか病弱であったかというような周縁的と考えられる瑣末な事項に至るまで、ありとあらゆる事柄に関して、ほとんど正反対の議論が提起され続けてきている。二項の対立が起こった時に、両方の説がそれなりの説得力を帯びてしまうという現象は、やはりテキスト自体が曖昧であるという事実を認めないわけにはゆかないだろう。失敗作ではないのに、物語の核心である最重要事項が曖昧ではっきりしないというような場合があるとすれば、小説家自身が意図的にそのような効果を狙ったと考えるのが妥当であり、唯一考えられる可能性であろう。換言すると、“TS”が内包する曖昧さは、精緻に計算し尽くされた語りのいい加減さと粗雑さ 読者に与えられる情報の欠如、その信憑性・不正確さまでを含めて が生み出す効果と言えるのではないだろうか。

III

前章で論じた“TS”の諸問題点に今一度立ち返ってみると、これらの論点に関しては、『創作ノート(*Notebooks*)』やニューヨーク版の「序文」において、ジェイムズ自身が解決の手掛かりを与えてくれているように思われる。ニューヨーク版の「序文」は、“this perfectly independent and irresponsible little fiction [“TS”] rejoices, beyond any rival on a like ground, in a conscious provision of prompt retort to the sharpest question that may be addressed to it”(xiv) という書き出しで始まり、読者が“TS”に対して提起する疑義に反論の準備ができていと挑発する。⁵ 小説家が頗る読者の反応を意識していることが窺える。また、“it is a piece of ingenuity pure and simple, of cold artistic calculation, an *amusement* to catch those not easily caught (the ‘fun’ of the capture of the merely witless being ever but small), the jaded, the disillusioned, the fastidious”(xviii) という一節もあり、読者への挑戦的な意図が感じられる。Brook-Rose は、“Edna Kenton (1924) was the first to suggest that TS [sic] was not a simple ghost-story but an author’s joke at reader’s expense”(266) と指摘し、同じく前掲の「序文」の部分に言及している。読者 それも用心深い読者 を騙そうという意図を持った上で、ジェイムズが“TS”という作品を練り上げたという事実は、彼自身がその「序文」において述懐する通りなのだが、早い時期に Kenton の指摘があり、一時的に脚光は浴びたものの、このような読み方はそれほど熱心には議論されてこなかった。また、ジェイムズは「序文」の中で、ある読者から批判があったが、それが見当ちがいであると一笑に付している (xviii-xix) 。読者の読みが間違っていることをわざわざ「序文」であげつらうというのは、ジェイムズの場合に限らず、類をみないケースと言ってよいのではないだろうか。ジェイムズは、作家の意図を読み取ることができない駄目な批評家であり語り手でもある「私」を、小説家自身が非難するという筋書きの“The Figure in the Carpet”を“TS”が世に出る2年前に書いているだけに、“TS”もこの短編小説の延長線上にあり、同種の主張を内包していると考えの方が無理がないように思われる。古茂田氏も、著書『H・ジェイムズ「ねじのひねり」とその前後の小品』の中で、“The Figure in the Carpet”を取り上げて、小説家と彼の作品の意図を理解できない読者と批評家の関係を論じて、この短編は、ジェイムズなりの読者・批評家への「仕返し」(82)であると評している。また、ジェイムズの

作品はいわば読者との「知力比べ」であり、『『ねじのひねり』でもって1つの極点をなす』(64)とも持論を展開している。このように、読者が“TS”を読み誤ることを期待しているとも思えるようなジェームズの狙いは、作家自身の言葉によって「序文」で率直に語られており、研究者もしばしばこれを取り上げているのだが、幽霊の出現の真偽の方へ関心が集まり過ぎて、白熱した議論には至らなかったというのが実情だ。

ジェームズの狙いが、読者を欺くことにあったとすれば、確かに混迷を極めて堂々巡りを繰り返す今日の“TS”批評のあり方は、彼の巧妙な術に見事にはまってしまった結果であるようにも思えてくる。その一方で、ジェームズ自身が“pot-boiler”(Edel *Letters* 4: 86)と呼んでいるこの中編小説が、それほど複雑な物語であるはずはないと Beidler は指摘(14 - 15)する。当時、経済的に窮していたジェームズが、極端に手の込んだ精巧な作品を手がけている余裕などはなかったという主張だ。さらに興味深い事実が1つある。ジェームズは、常日頃から小説を書くための素材を『創作ノート』に書きこんでいたが、“TS”の骨格となる逸話が書き留められた日付は、1895年1月12日であり、*Guy Domville* の舞台が酷評された僅か1週間後だ(Beidler 14)。この劇作の上演失敗が、彼自身の芸術観を理解しない大衆への幻滅に追討ちをかけたことは、まず疑う余地がないだろう。

では、実際にジェームズが素材とした“TS”のもととなった逸話がどのようなものであったのかをみてみよう。

Saturday, January 12th, 1895. Note here the ghost-story told me at Addington (evening of Thursday 10th) by the Archbishop of Canterbury: the mere vague, undetailed, faint sketch of it being all he had been told (very badly and imperfectly), by a lady who had no art of relation, and no clearness: the story of the young children (indefinite number and age) left to the care of servants in an old country-house, through the death, presumably, of parents. The servants, wicked and depraved, corrupt and deprave the children; the children are bad, full of evil, to a sinister degree. The servants die (the story vague about the way of it) and their apparitions, figures, return to haunt the house and children, to whom they seem to beckon, whom they invite and solicit, from across dangerous places, . . . so that the children may destroy themselves, lose themselves by responding, by getting into their power. So long as the children are kept from them, they are not lost: but they try and try and try, these evil presences, to get hold of them. It is a question of the children ‘coming over to where they are.’ It is all obscure and imperfect, the picture, the story, but there is a suggestion of strangely gruesome effect in it. The story to be told tolerably obviously by an outside spectator, observer. (Edel *Notebooks* 109) [下線は全て筆者]

“TS”の筋立ては、ほぼ『創作ノート』の通りに展開していると言ってよい。注視すべきは、このエピソードのジェームズへの伝えられ方であろう。下線を付した語句に着目すればわかるように、小説家自身がこの逸話を知るに至る伝達のあり方は極めて粗雑である。“vague”や“obscure”という単語が繰り返されるように、曖昧模糊としていて、不完全で詳細を欠くのである。ジェームズ自身は、カンタベリー大司教からこの話を知らされることになるが、大司教もまた、間接的にある女性、それも要領を得ない語りの手先の女性から伝え聞くことになる。この語りの構造は、まさに“TS”のそれである。“TS”と『創作ノート』中の各人物の対応を示せば、「家庭教師/語りの手先の女性」、「Douglas/カンタベリー大司教」、そして『私』=“an outside spectator, observer”/ジェームズ」という図式が成り立つだろう。

“TS”の語りの構造の複雑さの中に、何か特別なジェームズの狙いを探し求めることも可能かもしれない

いが、“TS”の原型となる素材については、小説家自身もこのように何とも覚束ない形で不確かな情報を僅かばかり聞かされたに過ぎない。穿った見方をすれば、そもそものジェイムズの出発点は、現実の世界で私たちが他人からある話を伝え聞く時の粗雑さ、信憑性のなさを再現することにあつたのではないかと思えなくもない。我々が現実の世界において、ある出来事やある人物について知ることのできる精度とは、所詮その程度のものであろう。ジェイムズは、カンタベリー大司教から聞かされた海の物とも山の物ともつかないこの幽霊話を、彼自身が受け取ったのと同様のいい加減さで読者に提示してみせた。そして、ジェイムズは、彼自身でさえその全貌を把握しきれなかった物語に勝手な想像と解釈をして踊らされている読者を高みから冷ややかに見降ろしているのではないだろうか。

結 び

“TS”は幽霊という超自然的な存在を取り入れて、お伽噺のような体裁を装いながら、それでいて19世紀の写実的な描写、複雑な語りの構造といった近代小説的な手法でもって表現されている。2章で引用した、家庭教師が窓に顔を張り付けていた Quint (と推定される男)の容貌を Grose 夫人に語る時、その描写は、童話やお伽噺の語り口とはかけ離れている。そのため、筋の通った論理的な1つのアプローチで“TS”を解体しようと試みれば、必ず無理がいくようにできている。精神分析に代表される科学的論理的な手法で挑めば、Milesの死が分解できずに残ってしまう。だからといって、幽霊は超自然的な存在であると認めて、何かの象徴かアレゴリーだと仮定しようとしても、幽霊に役割が与えられていないため、やはり完全には“TS”を消化しきれない。このような状況を作り出すことによって、ジェイムズは的外れな議論を続ける読者を嘲笑しているのであろう。“TS”は、芸術家こそ登場しないけれども、彼の作品を理解できない読者や批評家を揶揄している点では、“The Figure in the Carpet”に代表されるような「芸術家もの」と軌を一にする作品と言ってよいのではないだろうか。「序文」の“an amusette to catch those not easily caught (the ‘fun’ of the capture of the merely witless being ever small), the jaded, the disillusioned, the fastidious”という一節が、全てを物語っているように思われる。

註

- 1 これ以後、“The Turn of the Screw”への言及は、“TS”と略す。またテキストは New York 版を用いているが、本論における引用は、本文中に頁ナンバーのみを記す。
- 2 “The Figure in the Carpet”は Rimmon-Kenan によって“unreadable”だと指摘された例がある(95-115)。
- 3 不審者の男性が窓の外に留まっていた時間については、He remained but a few seconds (184)とある。
- 4 Havelock Ellis contented that “servant-girls of lower class’ played a great part in the sexual initiation of their employers’ children”; and one of the reasons Victorian parents sent their children to boarding school was “to protect them from the temptations offered by servants.” (Ballinger 213)
- 5 ニューヨーク版は、“The Aspern Papers”と“TS”、及びその他の作品への序文が纏めて書かれている。ここで言うのは、“TS”への序文の冒頭である。

Works Consulted

- Allen, Jean Thomas. “The Turn of the Screw and *The Innocents*: Two Types of Ambiguity.” *The Classic American Novel and the Movies*. Ed. Gerald Geary and Roger Shatzkin. New York: Ungar, 1977. 133-42.
- Allen, John J. “The Governess and the Ghosts in *The Turn of the Screw*.” *Henry James Review* 1. 1 (1979): 73-80.
- Armstrong, Nancy. “Character, Closure, and Impressionist Fiction.” *Criticism*. 19. 4 (1977): 317-37.
- Ballinger, Leonora M. “*Apparitions and Night-Fears*”: *Psychosexual Tensions in the Ghostly Tales of Henry James*. Diss. New York U,

1996. Ann Arbor: UMI, 1996. 9931648.
- Beidler, Peter G. *Ghosts, Demons and Henry James: The Turn of the Screw at the Turn of the Century*. Columbia, MO.: U of Missouri P, 1989.
- Beit-Hallah, Benjamin. “*The Turn of the Screw* and *The Exorcist*: Demoniical Possession and Childhood Purity.” *American Imago* 33 (1976): 296-303.
- Bell, Millicent. “*The Turn of the Screw* and the *recherché de l’absolu*.” *Delta*. 15 (1982): 33-48.
- Bengels, Barbara. “The Turn of the ‘Screw’: Key to Imagery in Henry James’s ‘The Turn of the Screw.’” *Studies in Short Fiction*. 15. 3 (1978): 323-27.
- Brooke-Rose, Christine. “The Squirm of the True: An Essay in Non-Methodology.” *PTL*. 1.2 (1976): 265-94.
- . “The Squirm of the True: An Essay in Non-Methodology.” *PTL*. 1.3 (1976): 513-46.
- Clark, Susan A. “A Note on *The Turn of the Screw*: Death from Natural Causes.” *Studies in Short Fiction*. 15.1 (1978): 110-12.
- Cook, David and Timothy J. Corrigan. “Narrative Structure in *The Turn of the Screw*: A New Approach to Meaning.” *Studies in Short Fiction*. 17.1 (1980): 55-65.
- Curtsinger, E. C. “*The Turn of the Screw* as Writer’s Parable.” *Studies in the Novel*. 12.4 (1980): 344-58.
- Edel, Leon, ed. Vol.4 of *Henry James Letters*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1984.
- Edel, Leon and Lyall H. Powers, eds. *The Complete Notebooks of Henry James*. Oxford: Oxford UP, 1987.
- Faulkner, Howard M. “Text as Pretext in *The Turn of the Screw*.” *Studies in Short Fiction*. 20.3 (1983): 87-94.
- Felman, Shoshana. “Turning the Screw of Interpretation.” *Yale French Studies*. 55-56 (1977): 94-207.
- Grunes, Dennis. “The Demonic Child in *The Turn of the Screw*.” *Psychocultural Review*. 2.4 (1979): 221-39.
- Hallab, Mary Y. “The Turn of the Screw Squared.” *Southern Review*. 13.3 (1977): 492-504.
- . “The Governess and the Demon Lover: The Return of a Fairy Tale.” *Henry James Review*. 8.2 (1987): 104-15.
- Hill, Robert W., Jr. “A Counterclockwise Turn in James’s ‘The Turn of the Screw.’” *Twentieth Century Literature*. 27.1 (1981): 53-71.
- Holloway, Marcella M. “Another Turn to James’s *The Turn of the Screw*.” *CEA Critic*. 41.2 (1979): 9-17.
- Huntley, H. Robert. “James’ *The Turn of the Screw*: It’s ‘Fine Machinery.’” *American Imago*. 34.3 (1977): 224-37.
- James, Henry. Vol.12 of *The Novels and Tales of Henry James*. New York: Scribner’s, 1971.
- Jolly, Roslyn. *Henry James: History, Narrative, Fiction*. Oxford: Clarendon, 1993.
- Kauffman, Linda. “The Author of Our Woe: Virtue Recorded in *The Turn of the Screw*.” *Nineteenth-Century Fiction*. 36.2 (1981): 176-92.
- Kenton, Edna. “Henry James to the Ruminant Reader: *The Turn of the Screw*.” *A Casebook on Henry James’s The Turn of the Screw*. Ed. Gerald Willen. New York: Crowell, 1960. 102-14.
- Korenman, Joan S. “Henry James and the Murderous Mind.” *Essay in Literature*. 4.2 (1977): 198-211.
- Mall, David S. “Designed Horror: James’s Vision of Evil in ‘The Turn of the Screw.’” *Nineteenth-Century Fiction*. 39.3 (1984): 305-27.
- Matheson, Terence J. “Did the Governess Smother Miles?: A Note on James’s *The Turn of the Screw*.” *Studies in Short Fiction*. 19.2 (1982): 172-75.
- Mazzella, Anthony J. “An Answer to the Mystery of *The Turn of the Screw*.” *Studies in Short Fiction*. 17.3 (1980): 327-33.
- McElroy, John Harmon. “The Mysteries at Bly.” *Arizona Quarterly*. 37.3 (1981): 214-36.
- Milne, Fred L. “Atmosphere as Triggering Device in *The Turn of the Screw*.” *Studies in Short Fiction*. 18.3 (1981): 293-99.
- Mogen, David. “Agonies of Innocence: The Governess and Maggie Verver.” *American Literary Realism 1870-1910*. 9.3 (1976): 231-42.
- Murphy, Brenda. “The Problem of Validity in the Critical Controversy over *The Turn of the Screw*.” *Research Studies*. 47.3 (1979): 191-201.
- Murphy, Kevin. “The Unfixable Text: Bewilderment of Vision in *The Turn of the Screw*.” *Texas Studies in Literature and Language*. 20.4 (1978): 438-51.
- Nardin, Jane. “*The Turn of the Screw*: The Victorian Background.” *Mosaic*. 12.1 (1978): 131-42.
- Obuchowski, Peter A. “Technique and Meaning in James’s *The Turn of the Screw*.” *CLA Journal*. 21.3 (1978): 380-89.
- O’Gorman, Donald. “Henry James’s Reading of *The Turn of the Screw*: Part I.” *Henry James Review*. 1.2 (1980): 125-38.
- Palmer, James W. “Cinematic Ambiguity: James’s *The Turn of the Screw* and Clayton’s *The Innocents*.” *Literature/Film Quarterly*. 5.3 (1977): 198-215.
- Petry, Alice Hall. “Jamesian Parody, *Jane Eyre*, and ‘The Turn of the Screw.’” *Modern Language Studies*. 13.4 (1983): 61-78.
- Recchia, Edward. “An Eye for an I: Adapting James’s *The Turn of the Screw* to the Screen.” *Literature/ Film Quarterly*. 15.1 (1987): 28-

35.

- Rimmon-Kenan, Shlomith. "The Figure in the Carpet." *The Concept of Ambiguity: The Example of Henry James*. Chicago: U of Chicago P, 1977. 95-115.
- Robbins, Bruce. "Shooting Off James's Blanks: Theory, Politics, and *The Turn of the Screw*." *Henry James Review*. 5.3 (1984): 192-99.
- Rowe, John Carlos. "Screwball: The Use and Abuse of Uncertainty in Henry James's *The Turn of the Screw*." *Delta*. 15 (1982): 1-31.
- Scott, James B. "How the Screw Is Turned: James's *Amusette*." *University of Mississippi Studies in English*. 4 (1983): 112-31.
- Schleifer, Ronald. "The Trap of the Imagination: The Gothic Tradition, Fiction, and *The Turn of the Screw*." *Criticism*. 22.4 (1980): 297-319.
- Schultz, Elizabeth. "'The Pity and the Sanctity and the Terror': The Humanity of the Ghosts in 'The Turn of the Screw.'" *Markham Review*. 9 (1980): 67-70.
- Siebers, Tobin. "Hesitation, History, and Reading: Henry James's *The Turn of the Screw*." *Texas Studies in Literature and Languages*. 25.4 (1983): 558-73.
- Stepp, Walter. "*The Turn of the Screw*: If Douglas is Miles . . ." *Nassau Review*. 3.2 (1976): 76-82.
- Taylor, Michael J. H. "A Note on the First Narrator of 'The Turn of the Screw'." *American Literature*. 53.4 (1982): 717-22.
- Tierce, Mike. "The Governess's 'White Face of Damnation.'" *American Notes and Queries*. 21.9-10 (1983): 137-38.
- Timms, David. "The Governess's Feelings and the Argument from the Textual Revision of *The Turn of the Screw*." *Year Book of English Studies*. 6 (1976): 194-201.
- Wagenknecht, Edward. *The Tales of Henry James*. New York: Ungar, 1984.
- Weisbuch, Robert. "Henry James and the Idea of Evil." *The Cambridge Companion to Henry James*. Ed. Jonathan Freedman. Cambridge: Cambridge UP, 1998. 102-19.
- Weissman, Judith. "Antique Secrets in Henry James." *Sewanee Review*. 93.2 (1985): 196-215.
- 大津栄一郎 『『ねじの回転』と幽霊』『ヘンリー・ジェイムズ研究』高橋正雄編 北星堂、1980年。
- 古茂田淳三 『H・ジェイムズ「ねじのひねり」とその前後の小品』英宝社、2001年。
- 古茂田淳三訳 『ねじのひねり ? 正解のない幽霊物語? 』ヘンリー・ジェイムズ著 あぼろん社、1993年。
- 多田敏男訳 『ヘンリー・ジェイムズ「ニューヨーク版」序文集』関西大学出版部、1980年。
- 踏沢忠枝訳 『ねじの回転』H・ジェイムズ著 新潮文庫、1983。

! Home. Literature Notes. The Turn of the Screw. Book Summary. Table of Contents. She then begins to wonder if the children know of the presence of the apparitions. Upon observing the children's behavior, she decides that they must be aware of the presence of these figures. She notes that once in the middle of the night little Miles is out walking on the lawn. Also, little Flora often gets up in the night and looks out the window. Coming back early one day from church, the governess finds Miss Jessel in the schoolroom. During the confrontation, the governess feels that the former teacher wants to get Flora and make the little girl suffer with her. She is now determined. The imagery of *The Turn of the Screw* is reminiscent of gothic fiction. The emphasis on old and mysterious buildings throughout the novella reinforces this motif. James also relates the amount of light present in various scenes to the strength of the supernatural or ghostly forces apparently at work. In popular culture, *The Turn of the Screw* has also influenced television.[30] In December 1968, the ABC daytime drama *Dark Shadows* featured a storyline based on *The Turn of the Screw*. In the story, the ghosts of Quentin Collins and Beth Chavez haunted the west wing of Collinwood, possessing the two children living in the mansion. Read by: Nikolle Doolin *The Turn of the Screw* is a novella written by Henry James. It is a ghost... Reviewer: Clanky - favoritefavorite - October 6, 2008 Subject: *The Turn of the Screw*. I have to say that I listened only through the first chapter. The story seemed as though it would be interesting, and the reader's voice and style seem as though they might have been lovely in person or perhaps on a conventional recording device, but the computer-like utterances and spacing and silences was something I simply found too irritating. It relates trends in *The Turn Of The Screw* criticism to developments in literary criticism and literary theory and discusses how the latter have been influenced by broader historical and cultural changes. In the course of this discussion other Jamesian works are analyzed. This is a valuable study for Jamesian scholars, as well as for students of literary theory - it can be seen as a study of the development of literary theory in the twentieth century with this particular literary work as a touchstone study. Introduction. Chapter I - Henry James on *The Turn of the Screw*. Learn about Henry James's 'The Turn of the Screw'—the classic ghost story that inspired (among many other things) Netflix's 'The Haunting of Bly Manor.' In 1898, Henry James published *The Turn of the Screw*, a bone-chilling novella about a governess, two seemingly saintly children, and a couple of wicked ghosts who may or may not actually be there. James wanted his terrifying tale to "escare the whole world," and more than a century later, it's still doing just that. The story has inspired countless adaptations in every format, the most recent being Netflix's *The Haunting of Bly Manor*—a follow-up to 2018's *The Haunting of Hill House* (which was based on Shirley Jackson's classic 1959 novel). Prepare to be unnerved all over again with th